

発音記号再考

橋本 雅文

1. はじめに

英語の教科書には、申し合わせたように新出単語が発音記号とともに登場する。発音記号さえあれば、学習者はそれを見て正しく発音できることが前提になっているかのようなのである。ところがそれは事実ではない。英語を得意とする生徒でも、「発音記号は何となく読めるくらい」というのが実態であろう。

本稿では、発音の指導を、発音記号を中心に現場の視点から論じてみる。

2. [ɛə] から /eə/ へ

2.1. 変更の理由

『新英和中辞典』（研究社）の第5版で air を引くと、発音は [ɛə] と表記されているが、同辞典の第6版では /éə/ へと変更されている。（実際には第6版では、/éə|éə/（米音|英音）となっている。これは他の辞典で多く見られる /éər/ と同じ意味をもつものであるが、本稿ではアメリカ発音に見られるこの種の /r/ は扱わない。）なお、第5版は1985年、第6版は1994年の発行である。

ここでは2つの変更が見られる。音声を表記するのに使用される記号の変更（[] → / /）と音声表記そのもの変更（e → é）である。この両者の変更は互いに関連している。というのは [] が個々の言語音を表すのに対して / / は音素（意味の異同に関与しない言語音のグループ）を表すからである。すなわち、[ɛ] を /e/ という音素に属するひとつの言語音とみなすということである。

[ɛ] は、たとえば there [ðéə] のように、その直後に [ə] が来る環境でしか用いられず、たとえば then [ðén] のように、その後に [ə] 以外の言語音が来る環境で用いられることはない。一方、[e] については、その直後に [ə] が来る環境で用いられることはない。よって [ɛ] と [e] とは互いに対立する関係（意味の異同に関与する関係）にはないことになる。

これに対して、たとえば hair [héə] と here [híə] とでは、[ɛ] と [i] との違いが意味の違いに関与することになるので、両者はそれぞれに異なる音素に属すると考えられる。以上のことから、[ɛ] を /e/ のグループに入れても差し支えないということになる。つまり air や there や hair の発音をそれぞれ [éə], [ðéə], [héə] と表記しても、これによって学習者に混乱を与えることはない。

『新英和中辞典』に見られる表記の変更も、そういう考えを反映したものであると考えられる。また、現在日本で発行されている他の辞典や教科書なども、概ね [eə] を採用している。

ただ、[] か / / については、理由は定かではないが、教科書では前者を、辞典では後者を採用している場合が圧倒的に多いように見受けられる。なお、本稿では [] で表記することにする。

2.2. [ɛ] を用いた理由

次に、なぜ [ə] が直後に来る環境のみで [ɛ] を用いるのかを考察する。一般に、[e] は半狭母音であるのに対して [ɛ] は半開母音だと説明される。つまり、前者よりも後者のほうが発音する際の口の開き方が大きい。一方、schwa [ʃwá:] と呼ばれる [ə] は、半狭と半開の間に位置する中舌の曖昧に聞こえる母音で、たとえば about [əbáut] の最初の音がそれである。

発話における音声はふつう単独の音ではなく、連続した音からなる。したがって私たちが発話するときには、無意識のうちに常に次の音に備えている。これを実感するために、例として次のふたつの単語を声に出して言ってみる。

- (1) a. 煙突（えんとつ）
- b. 鉛筆（えんびつ）

次に、下線を引いた「ん」の部分を引き伸ばして

- (2) a. えんーとつ
- b. えんーびつ

と発音して、両者の下線部における口の形状を比べてみる。すると、前者では口が少し開いているが、後者では口が閉じていることがわかる。これは「えんぴつ」では、[n]の音が次に来る口を閉じて発音する[p]に備えて、自然に[m]となるためである。ところが、この口の形状の違いにかかわらず、私たちは「えんとつ」と「えんぴつ」を同じ「ん」という表記で済ませることに何の不都合も感じない。

さて、話を[eə]に戻す。[e]ではなくて[e]を使う理由は、[e]が後に控えている[ə]に備えて、口を少し開き気味にする際の音を表記するためであろう。しかし、言語音が多少異なるとしても、それを学習者に異なる発音記号を用いて提示する必要がないことは、上記の「ん」で例証したとおりである。

3. [ɑ]と[a]

[eə]を[eə]と表記することによって、他の環境で使われることのない[e]という発音記号をひとつ減らすことができるが、それによってその分、学習者の負担を減らすことが可能になったと言える。

次に、[ɛ]と[e]に続いて、[ɑ]と[a]について考察する。発音記号として[a]が登場する環境は、[e]の場合と同様に、非常に限定されている。[ɑ]はlife [láif]やhouse [háus]のように、その直後に[i]または[u]が来る場合のみ用いられる記号で、他の環境で用いられることはない。一方、[a]はstop [stáp]やpark [pá:k]などの語で登場する記号で、[i]や[u]の直前で用いられることはない。

[ɑ]と[a]が互いに対立することがないのであれば、[ɛ]、[e]の場合と同様に、発音記号の統合ができるのではないだろうか。

そもそも[a]と[ɑ]とは、どのような違いがあるのだろうか。両者はともに口を大きく開いて発音する開母音であるが、前者は前舌母音、後者は後舌母音と説明される。つまり、[ɑ]の音を出すときの舌の最高点は、[a]の場合よりも口の前方にある。

両音の違いを実感するには、たとえば上記のlifeとstopを、次に示すように、ハイフンのところでポーズをとって発音してみるとよい。

(3) a. life [lá-if]

b. stop [stá-p]

舌の最高点が口の中のどこにあるかを自覚することは難しいが、口の開き方の違いは意識できるだろう。

つまり、[ɑ]のほうが[a]よりも口が若干小さくなることがわかるだろう。ちなみに、人間の口は、開くときにまっすぐ下に開くわけではなく、後方に引くようにして開いていくわけだから、この実感は、人体の構造上からも正しいものと思われる。

さて、直後に[i]と[u]が来るときに限って、なぜ[a]よりも口の小さい[a]になるかと言えば、それは次に来る狭母音の[i]、[u]に備えて、あらかじめ口を小さくしておくためにほかならない。

となると、たとえばlifeやhouseの発音をそれぞれ[láif]、[háus]と表記したところで、[ɑ]の音を発するときの口は無意識のうちに自然に小さくなるのだから、まったく問題はないはずである。

4. [ɔ]と[o]

日本語の「オ」に近い言語音は[ɔ]と表記されるが、この[ɔ]は、その直後に[u]が来る場合に限って[ou]と表記される。そして上述の[a]、[ɑ]と同様に、[o]と[ɔ]も対立することはない。さらに[o]と[ɔ]は、やはり[a]、[ɑ]と同様に、前者のほうが後者よりも口を少し狭めて発音される。

そうすると、[ɑ]と[a]の関係は[o]と[ɔ]の関係に等しい、と考えても差し支えないようである。ところが、不思議なことに、[ɑ]が[ai]と[au]の両方の場合に用いられるのに対して、[o]は[ou]の場合にのみ用いられて、[oi]とは表記されない。あとに[i]が続く場合に[a]は用いるが[o]を用いない理由は、音声分析などの裏づけがあることなのかもしれない。しかし、このような記号の使い分けは、一般の学習者にとっては何の価値もない。たとえば

(4) a. light [láit]

b. loud [láud]

などの語では、[ɑ]よりも小さめの口を意識して、

(5) a. vote [vóut]

b. voice [vóis]

などの語においては、(5a)では[ɔ]よりも小さめの口を意識し、(5b)では[ɔ]と同じ大きさの口を意識して発音する、などということはあるからである。そのようなことをまったく意識していないことは、これらの語を実際に発音してみれば、ただちに明らかになる。

そもそも発音記号とは、読み手にどう発音するかを示すものである。言い換えると、発音に際してど

う意識すればよいのかを読み手に指示するためのものである。とすれば、[ou]と[oɪ]における[o]と[ɔ]の使い分けは、ひいては、他の環境における[o]と[ɔ]の使い分けも、まったく不要なものであるという結論になる。openとcoatは、それぞれ[sʊpn], [kəʊt]と表記すればよい。(もっとも、[ɔ]の代わりに[o]を選択して、voiceやoughtを[vóis], [ó:t]と表記してもよいのだが。)

[ou]という発音記号は、[ou]という表記に慣れ親しんできた目には、当初は多少奇異に映るかもしれない。しかし、今までそうしてきたのだからという理由で、新しく学習を始める者に無用な負担を課すことは控えなければならない。

5. [ə]と[ʌ]

基本的にはひとつの単語にひとつの強勢があるとされるが、前置詞や接続詞などが文の中で登場するときには強勢を受けないことが少なくない。たとえばbutは強く発音される場合には[bʌt]となるが、“Excuse me, *but* are you Mr. Smith?”などでは[bət]と弱く発音される。

さて、[ə]が曖昧な音を表すことは2.2.で述べたとおりだが、これは強勢を受けることのない母音で、決して[é]とはならない。一方、[ʌ]はほぼ常に強勢を受ける母音で、[ʌ]と表記される。したがって、たとえばadjustは[ədʒʌst]となる。

[ə]と[ʌ]は、強勢の有無以外はすべて同じかという、必ずしもそうとは言えないだろう。[ə]のほうが、その曖昧さゆえに、[ʌ]に比べて音域は若干広いように思われる。というのは

- (6) a. adult [ədʌlt]
 b. capital [kæpətɪl]
 c. today [tədeɪ]
 d. camera [kæməɾə]
 e. cosmos [kɔzməs]

における[ə]はすべて同じ音ではなくて、上から順にそれぞれ微妙に日本語の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」に近い音のように聞こえる気がするからである。それに対して、[ʌ]のほうは

- (7) a. run [rʌn]
 b. color [kʌlə]
 c. something [sʌmθɪŋ]

に見られるように、音域が日本語の「ア」に近い音

に限定されているように聞こえる。

しかし、この音域の範囲の差が、[ə]と[ʌ]を併用する理由として説得力をもつとは思われない。曖昧な[ə]の音でも、それを強く読めば、意識しなくても自然に、より狭い音域のものに収束されていくのではないだろうか。もしそうなら、runやcolorの発音をそれぞれ[rʌn], [kʌlə]と表記しても、それによって発音に混乱を生じるとは考えられない。

6. [n]と[m]と[ŋ]

ここまでは、母音の発音記号についての私論を展開してきたが、次に、子音の[n], [m], [ŋ]について考えてみることにする。

まず、(1)で見たように、日本語を例に考察を始める。

- (8) a. 煙突 (えんとつ)
 b. 鉛筆 (えんぴつ)
 c. 宴会 (えんかい)

をそれぞれ発音記号で表記すると、次のようになる。

- (9) a. [entɒtsu]
 b. [empitsu]
 c. [eŋkai]

日本語の表音文字である「ひらがな」ではすべて「ん」で表すことができる音が、英語では[n], [m], [ŋ]の3種類の異なる発音記号で表される。

その理由は、やはり次に来る音声に備えるためにほかならない。この3種類の音を実際に発音して、それぞれの音の出し方を確認してみると、(9a)の[n]と[t]は共に歯茎音(舌の前方を上あごの歯茎にあてることで発する音)であり、(9b)の[m]と[p]は共に両唇音(両唇で口を閉じることで発する音)で、また(9c)の[ŋ]と[k]は共に軟口蓋音(舌の後方を軟口蓋にあてることによって発する音)であることが実感できる。

ところが、日本語ではこれらがすべて「ん」で表記されているが、私たちはそれで不便を覚えることはない。それは[n], [m], [ŋ]の使い分けは、意識しなくても自然にできるからである。とすれば

- (10) a. candle [kændl]
 b. champion [tʃæmpjən]
 c. English [ɪŋɡlɪʃ]

の[m]と[ŋ]を(11)に示すように、[n]に置き換えても問題はないということになる。

- (11) a. candle [kændl]
 b. champion [tʃæmpjən]
 c. English [ɪŋɡlɪʃ]

こうすることによって、発音記号のさらなる削減が可能になったかのように思われる。しかし、実際には、そう簡単に事が運ぶわけではない。

まず、[m]について検討する。次の(12)の例のように、[m]が語頭や語尾に来る場合には、明らかに、[m]を[n]で置き換えるわけにはいかない。

- (12) a. nine [náin]
 b. mine [máin]
 c. then [ðén]
 d. them [ðém]

仮に、(11b)では[m]を[n]に置き換え、(12b, d)ではそのまま[m]を使用するなどすると、学習者の負担を軽減するための変更が、学習者を混乱させることになりかねない。したがって、[m]の[n]への変更は妥当ではないことになる。

続いて、[ŋ]について考察する。英語では[ŋ]が語頭に来ることはないので、語頭での混乱の心配は要らない。また、[ŋ]が次のように語中に来る場合には、[ŋ]を[n]に置き換えても、問題はなさそうである。

- (13) a. think [θɪŋk] ⇒ [θɪnk]
 b. angry [æŋɡri] ⇒ [æŋɡri]

それは、上記のように[n]を意識しても、[k]、[g]の前では自然に[ŋ]になるからである。

[ŋ]が日本語話者にとって厄介なのは、語尾が-ngになる(14)のような場合である。

- (14) a. young [jʌŋg]
 b. sing [sɪŋg]

なぜ厄介かと言えば、これらの語を

- (15) a. *[jʌŋg]
 b. *[sɪŋg]

と間違っ発音することが多いからである。さらには、日本人学習者が*[jʌŋɡu]、*[sɪŋɡu]と発音するのもよく耳にする。

さて、日本語話者が苦手とする-ngを語尾とする語の発音をよりわかりやすく表記する方法はないのだろうか。[ŋ]の音それ自体は、後に[g]が来る場合には難なく発音できるのであれば、本稿のねらいである発音記号の数の削減とそのわかりやすさの両方を目指して、(16)に示すように変更してはどう

だろうか。

- (16) a. young [jʌŋg]
 b. sing [sɪŋg]

[g]に取り消し線を入れることで、その音を発音しないことを可視化しようという試みである。

(17) -ngで終わる語は[ŋ]と発音されるよりも

- (18) -ngで終わる語は[nɡ]となつて、[g]は発音されない

と説明したほうが、はるかに理解しやすく、かつ発音しやすいのではないだろうか。

7. おわりに

本稿では、[ɛə]から[eə]への変更にならつて

- (19) a. [ai], [au] ⇒ [ai], [au]
 b. [ou] ⇒ [ɔu]
 c. [ɹ] ⇒ [ɹ]
 d. [ŋ] ⇒ [n] (語尾の [ŋ] ⇒ [ŋɡ])

の変更の可能性とその妥当性をなるべく具体例を提示しながら論じた。

もし本稿での提案が受け入れられて、その結果、辞典や教科書などの表記が変更されれば望外の喜びである。ただ、あくまで望外であつて、それを期待しているわけではない。しかし、たとえ表記が変更されなくても、現場の教師にもできることはある。学習者が目にする教材に問題や疑念が認められる場合には、それを少しでもわかりやすく加工することこそが、現場の教師の仕事である。

生徒：先生、発音記号の[a]と[a]とは違う音なんですか。

先生：よく気がついたね。[a]のときの口は思いつき大きくて、[a]はそれよりも少しだけ口の小さい「ア」なんだけど、その次に口を小さくして出す[i]や[u]が来るときには、自然に[a]の音になるから、意識しなくていいよ。ほんとは、[a]と[a]の二通りの記号なんて要らないんだけどね。こんなやりとりができれば、と願うばかりである。

(京都教育大学附属高等学校教諭)